

【第14回年次大会 研究発表 要旨】

日本語 OPI から考える日本語教育とジェンダー

銭坪玲子

1. 目的

日本語 OPI に関するジェンダー的側面からの批判的考察を通して、日本語教育におけるジェンダー的視点の導入について考えたい。

2. 日本語教育と日本語 OPI

近年、外国語教育においては、実際の運用力の育成を中心とした学習や教育手法を求める動きが活発である。これらは、従来の文法重視及びペーパー試験重視の教育に対する反省から出てきたものである。日本語教育も例外ではなく、「プロフィシエンシー」が近年のキーワードの一つとなり、日本語会話のプロフィシエンシーを測定する日本語 OPI が登場するなどしている。また、国際交流基金は JF スタンダードを構築し、1984 年以来実施されてきた日本語能力試験は、課題遂行能力の測定を軸に 2010 年から問題内容等が改定される運びとなった。

このような潮流のなかで、日本語教育という領域において、「プロフィシエンシー」重視という一つの方向性を明確に指し示したという点において、日本語 OPI が果たした功績は小さくない。しかし、近年、OPI に対する批判的考察も登場しており、いまだ議論の余地は多く残されているといえるだろう。例えば、宇佐美 (2009 ; 2013)、山田 (2013) では、言語テストとしての妥当性や信頼性という側面から、OPI について批判的な考察が加えられている。日本語会話能力を評価する際、評価の軸をどこに、どのように設定するのかが問われているといえるだろう。

3. 日本語 OPI とジェンダー的問題

牧野 (2010) は、1980 年代後半から批判の対象とされてきた OPI の海外の状況について紹介し、それらを 4 つに整理している。1. 基準の有効性、2. 母語話者の判断の多様性の否定、3. タスクの幅の狭さ、4. テスターと被験者に存在する権力関係、である。銭坪 (2010) では、おもに 4 について、ジェンダー的視点から考察を加えた。結果、日本語超級レベル判定においては敬語とくだけた表現、二つの摘出が必須とされているが、「現実的で文化的にも実際に近い会話のやりとりに終始することができるかどうか」(牧野 1999) が大切だといわれる OPI において、テスターが女性である場合、日本社会で超級レベルのタスクを適切に実施することは困難であること、それはテスター個人の技術力不足といった問題ではなく、社会的属性、すなわち現代日本社会におけるジェンダー的非対称性に起因するものであることを明らかにした。

4. ジェンダーをめぐる歴史社会学的視点及び社会理論

中村 (2012) は、「女ことば」についての調査・分析を通して、「女ことば」と日本近代国家形成の密接な関係性について明らかにした。「女性」や「女性性」というものが、時代によって、政治や経済に利用されてきた姿を描き出している。岡本 (2008) は、古代から女性は「女らしい」ことばを使うべきであるという支配的な言語イデオロギーが日本にはあったということ、そして、それぞれの歴史的背景の中で、そのイデオロギーが様々な政治的意義を与えられて再生産されてきたことを明らかにしている。

これらの研究にみられる視座は、1980年代以降の学問的趨勢の延長線上に位置づけられるだろう。なかでも、フィリップ・アリエスに代表されるアナル学派による社会史研究、歴史社会学の成果は、日本の近代家族・ジェンダー・子供研究等に大きなインパクトを与えてきたといわれる。以降、日本の近代家族も、歴史社会的あるいは構築主義的な考察の対象となってきた。いまでは、日本の近代家族も、時代に応じて形態やイデオロギーが変化し、地域や社会階層によっても様々に姿を変えるものであったということが、先行研究から明らかとなっている。また、これらの近代家族研究は、ジェンダー研究とも密接な関係にある。

また、これらのマクロ的視点からの分析のみならず、江原(2006)によれば、ミクロ的視点から、ジェンダーを考察しうる社会理論も近年相次いで登場してきている。例えば、ゴッフマンやギデンズ、ブルデューの理論等は、日常生活における行為の場面に着目するものであり、日常実践の積み重ねが、権力構造を再構築・再生産している様相を指摘しうるものであるという。

これらの歴史的あるいは社会構造的側面からのアプローチを積極的に取り入れることは、日本語教育とジェンダーについて考えていくためには必要な作業なのではないだろうか。

5. 今後の課題

これまでのジェンダー研究の知見を日本語教育にいかに導入すべきか、定まった見解はまだない。水本(2013他)、渡部(2006)は、既存の日本語教材をジェンダー的視点から分析し、ステレオタイプ的で性差別的描写が多くみられるということを示した。そして、内容が修正された、新しい日本語教材の開発を求めている。対して、小川(2006)は、実際に男女差が存在するのだから、「男女の話しことばの相違を教室で取り上げることが不可欠」だという。社会の現状をどのように捉え、また、それらを日本語教育にどのように反映させていくのか、今後継続した議論が待たれるところである。宇佐美(2008; 2009)は、自然会話の分析を通して、自然会話を素材とした教材を開発する必要性について述べている。第二言語教育では、学習者は目標言語・文化の成員に近い「見積もり」を獲得することが必要だという。しかし、性別等の不均衡が存在する社会であった場合、その文化の「見積もり」を獲得することが第二言語教育においてどのような意味を持つのか、改めて議論する必要があるのではないだろうか。好井(2012)によれば、会話録音による会話分析から映像を文字化するという相互行為分析が主流になりつつある現在、「分析者」あるいは「分析する」という行為さえも自明なものではなくなりつつあるという。つまり、会話分析も実証主義的分析ではなく、解釈学的な解説と見なされるようになっているのである。ここでは、抽出される「自然会話」すらも、分析者のある種の解釈に基づいた選択の一つにすぎない、ということになるだろう。

国際交流基金の調査によれば、2009年現在、日本語教育は133か国においておこなわれており、日本語学習者は約365万人だという。学問的言説や成果が一定程度の社会的機能をもつと同様、言語学習における教育や評価、教材の在り方は、学習者や言語観の形成に少なくない影響を与えられると思われる。日本語OPIに代表されるような、日本語能力の評価におけるジェンダー等の取り扱いについては、いまだ課題が多い。今後、日本語教育において、誰が、どのような日本語(教育)を提唱していくのか、また、その中にジェンダー的視点をどのように取り入れていくのか、検討を重ねていく必要があるだろう。

[参考文献]

- 宇佐美まゆみ (2005) 「ジェンダーとポライトネス-女性は男性よりポライトなのか?-」『日本語とジェンダー』第5号、日本語ジェンダー学会
- 宇佐美まゆみ (2009) 『伝達意図の達成度』『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉えるオーラル・プロフィシェンシー」鎌田修他『プロフィシェンシーと日本語教育』ひつじ書房
- 宇佐美まゆみ・山田ボヒネック頼子・堀恵子 (2013) 「コミュニケーション能力評価と談話研究の連携と課題-高等能力試験の談話の分析結果から-」『2013 年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- 江原由美子「ジェンダーと構造化論-ギデنز、ブルデューを中心に」江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』有斐閣
- 岡本成子 (2008) 「日本語における女性の言葉遣いに対する『規範』の再考察」佐藤慎司他編『文化、ことば、教育-日本語/日本の教育の「標準」を越えて-』明石書店
- 小川早百合 (2006) 「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識-日本語教育での活用へ向けて-」日本語ジェンダー学会編、佐々木瑞枝監修『日本語とジェンダー』ひつじ書房
- 坂本佳鶴恵 (2006) 「ジェンダーとアイデンティティ-ゴッフマンからバトラーへ」江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』有斐閣
- 銭坪玲子 (2010) 「日本語 OPI の超絶ロールプレイとジェンダー的問題」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』,8(1), pp.43-48.
- 中村桃子 (2012) 『女ことばと日本語』岩波書店
- 牧野成一監修 (1999) 『日本語改訂版 ACTFL-OPI 試験管養成用マニュアル (1999 年改訂版)』アルク
- 牧野成一 (2010) 「これから 20 年後の OPI のあるべき姿」日本語 OPI 研究会『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書』
- 好井裕明 (2012) 「会話分析」『現代社会学事典』弘文堂
- 渡部孝子 (2006) 「日本語教材とジェンダー」日本語ジェンダー学会編、佐々木瑞枝監修『日本語とジェンダー』ひつじ書房
- 国際交流基金「2009 年海外日本語教育機関調査」
(http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/survey_2009/2009-01.pdf 2013 年 6 月 15 日アクセス)

本稿 (本報告) は、科学研究費助成事業若手研究 (B) (課題番号 23720278) による研究成果の一部である。

(ぜにつぼ さちこ・長崎ウエスレヤン大学専任講師)